

網膜の再生もできるはず。いま治らない目の病氣も治療できるのではないかと考えたんです。これは私だけでなく、眼科医なら誰でも考えたことだったと思います。

眼科医の私がたまたまソーク研究所に行つて、当時、最先端の脳の再生医療研究に出逢つてしまつた。いまこれを知っている眼科医は私だけなのではないか、自分がやらなければ、目の再生医療、治療は五年、十年遅れるかもしれない……。そう思い込んだのが、一連の研究活動の始まりですね。

竹中 一つの使命感やろね。  
高橋 はい。眼科医として日々患者さんを診ていたので、「何とか治してあげたいな」という使命感はずっと持っていました。

あと、さっき言ったように、確かに大きな仕事をやりたいとは思つていなかったんですが、「新しいことをやりたいな」とは常に思つていました。それはいま振り返ると、母の影響だと思ふんです。

いまも覚えていのが、小学生の時に年末の紅白歌合戦を見ていて、母が「この歌手は自分で歌をつくったんか？ それともただ歌っているだけか？」と、毎回聞

いてきて、歌を自分でつくつた歌手が出たら「この人偉いね」って言ふんですよ。それで私は「新しいことをする人は偉いんだ」ということを刷り込まれた(笑)。

竹中 でも、どうして政代さんのお母さんは「つくる人が偉い」と考へるようになったんですか。

高橋 うーん、何でだろう。母は普通の主婦だったんですが、聞くところによると、結構、我儘な人で、昔から「人と同じことは嫌い」という性格だったようですよ。女学校に通つていた時に、一人だけ先生に反抗して、その授業だけは何と言われようと出なかつた。

竹中 ああ、確かにそのお母さんの血は流れているよね(笑)。  
高橋 我儘なところにね(笑)。

生きてるだけでいいんや

高橋 ナミねえは、どんなきつかけで現在の活動に携わるようになったんですか。

竹中 いま母親の話が出ましたけど、私にも同じような体験があつて……。私は一九四八年に神戸で生まれたのですが、父は京都帝国大学出身で、戦後は大企業の重役

コースを歩み、母は母で熊本の旧家のお嬢様だったんですね。

ところが、その母は旧家の出にも拘らず、父親と長男だけが一段高い席に座つて尻頭付きの料理を食べ、その他の家族は質素な生活をすると、というような当時の風潮が許せなかつたんですって。

子育てでも、私が夜泣きでギャン泣くと泣くと、起きておっぱいをあげないといけないじゃないですか。それを繰り返すのが堪らなく嫌だったみたいで、日記に「今夜もナミが泣いている。私は起き上がつて乳をやつているが、夫はその横で寝ている。ナミ、お前は男に負けない女になるんだよ」みたいなことを書いているんです。

高橋 すごい母親ですね(笑)。  
竹中 しかも、父が子供を可愛がらないなら分かりますけど、父は近所でも子煩悩で有名だった。

そんな母でしたから、次第に女性解放運動のようなものに嵌つていつて……。重役コースを歩んでいた父も、ある日、労働者が革命歌を歌いながら歩いている姿になぜかシンパシーを感じ、会社の窓から手を振つたことで勤め先をクビになってしまいました。「アカ」

だとレットテルを張られたんです。高橋 解雇されてしまった。

竹中 その時、母はどうしたかというのと、「世の中にとって正しいことをしたわ。クビになったことは正しい」と言つて、お赤飯を炊いた。以後、我が家はどれだけ貧しい生活をしなければならなかつたことか、もう本当に。親戚の家を転々としていた時期もあります。

そうした中で、私はグレて家出を繰り返して、悪い人とも付き合うようになって、「神戸で一番のワル」と言われるようになりました。周りからは「日本の非行少女の走りや」と言われてました。

高橋 そんなことをしたら、そう言われるんでしょうか(笑)。  
竹中 でも、両親からは「うちが貧しい」という言葉を一回も聞いたことがありませんでした。

それに、私がたまに家に帰つてきた時も、父は「ナミ、お前が生きてるだけでいいんや」と温かく迎えてくれるし、母も「あなたはいつか何者かになるからいいのよ」と怒られなかつたんです。

高橋 常に受け入れてくれた。  
竹中 だから、友達からはよく「ナミは絶対に実の子じゃない。本